

児童の村 関係資料集成

全3回配本・全7巻・別冊1

解説・浅井幸子(東京大学大学院教授)

揃定価●217,800円(揃本体198,000円+税10%)

体裁●全7巻/別冊1/A4判(2面付)/上製/総約2400頁

解説執筆●福元真由美(青山学院大学教授)・川地亜弥子(神戸大学教授)

推薦●門脇厚司(筑波大学名誉教授)・佐藤学(東京大学名誉教授)

田嶋一(國學院大学名誉教授)

協力●豊島区立郷土資料館、高知県立図書館、高知県立文学館、

今井紅子氏、門脇厚司氏ほか

別冊●「児童の村関係資料集成解説」(仮)

A5判/並製/約150頁 定価2,200円(本体2,000円+税10%)

※分売可 ISBN 978-4-83500-8906-5

お勧めします

教育学、教育史、幼児教育、教育思想、教育社会学、社会運動、メディア研究、児童文化、民衆史などの研究者、大学専門図書館



■「かんざつ」(『児童の村 六年間の生活』より)

配本/刊行予定/定価/ISBN・NO 978-4-83500-	第1回/2026年4月 揃定価92,400円 (揃本体84,000円+税10%) 889512	第2回/2026年7月 揃定価61,600円 (揃本体56,000円+税10%) 889910	第3回/2027年4月 揃定価63,800円 (揃本体58,000円+税10%) 890217	第4巻 小砂丘忠義	第5巻 上田庄三郎	第6巻 児童の村資料	第7巻 子供の村資料	巻数 巻タイトルほか
------------------------------------	--	--	--	--------------	--------------	---------------	---------------	---------------

※第3回配本は別冊も含みます。※配本・巻数・構成は変更となる場合がございます。

幼児教育資料アーカイブ5 復刻版 愛と美

全2回配本・全4巻・別冊1

完結!

揃定価●134,200円
(揃本体122,000円+税10%)

解説●福元 真由美

資料協力●畠山 兆子

推薦●浅野俊和・周東美材

体裁●全4巻/総約1700頁(4面付)/A4判/角背上製/布クロス装

別冊●解説・総目次・索引

定価2,200円(本体2,000円+税)

※分売可



「家なき幼稚園」で一世を風靡した橋詰せみ郎が、昭和初期・大阪の田園都市に夢見た、あたらしい教育のかたち。1927年から橋詰の死(1934年)まで発行された本誌からは、新中間層の新教育の実態がまざまざとよみがえる!

収録内容・配本●

配本	巻数(全巻数)	収録巻号数(発行年月)	揃定価	ISBN-NO(978-4-8350)	刊行予定
第1回	第1・2巻(全2巻)	第1巻1月号-第44号(1927年1月-1930年8月)	66,000円 (揃本体60,000円+税10%)	8860-0	2025年6月
第2回	第3・4巻(全2巻)・別冊1	第45号-第91号(1930年9月-1934年7月)	68,200円 (揃本体62,000円+税10%)	8863-1	2026年5月

幼児教育資料アーカイブ4 復刻版 子供の教養

全3回配本・全10巻・別冊1

揃定価●277,750円
(揃本体 252,500円+税 10%)

※配本ごとに分売可

解説●福元 真由美

資料協力●高崎 彰・武南恵二

推薦●太田素子・広井多鶴子

体裁●全10巻/総約3800頁(4面付)/A4判/角背上製/布クロス装

別冊●解説・総目次・索引

定価2,750円(本体2,500円+税)

※分売可。



昭和初期、大阪を中心として展開した『愛と美』に対して、東京・阿佐ヶ谷では高崎能樹が『子供の教養』が発刊される。『愛と美』と併せて、都市新中間層における幼児教育の動態を伝える貴重資料を完全版として復刻!

幼児教育資料アーカイブ2 戦前期愛育会関係資料集成

全4回配本・全11巻

在庫僅少!

揃定価●242,000円
(揃本体220,000円+税10%)

解説●湯川 嘉津美

推薦●網野 武博・穴戸 健夫

体裁●B5判・上製・総約4500頁(2面付)

三田谷啓、倉橋惣三、青木誠四郎ら各界の第一人者が全国的な母子保護運動を展開した戦前期。その資料を一挙に集成するはじめての試み!



極度の超形式主義をとり、学校、学級、教室、教科目、学年、時間割等

すべての既成概念に超越してやる

幼児教育資料アーカイブ6 《編集復刻版》

児童の村 関係資料集成

全3回配本・全7巻・別冊1

編集・解説

東京大学大学院教授

浅井幸子

Sachiko Asai

解説執筆

青山学院大学教授

福元真由美

Mayumi Fukumoto

神戸大学教授

川地亜弥子

Ayako Kawaji

徹底的な個性尊重の教育を解き明かす――

筑波大学名誉教授

門脇厚司

Atsushi Kadowaki

アヴァンギャルドの教育革新、その内側の声を開示する――

東京大学名誉教授

佐藤学

Manabu Sato

未発未見の新天地――「理想の学校」をめざした大正新教育の果実――

國學院大学名誉教授

田嶋一

Hajime Tajima



■本パンフレット写真はすべて今井紅子氏所蔵資料による。

不二出版

表示価格はすべて税込

不二出版

〒112-0005 東京都文京区水道2-10-10
FTEL 03-5998-1167
振替 0016002944084

こうした校内の「メディア」を通して、子どもたちや教師たちの声がとり交わされ、子どもたちと教師たちの学びが立ちあらわれる……それは新教育、生活綴方教育、生活教育などが生成するプロセスそのものでもある。同時に学校内のメディアが多く用いられ、それが教育空間を再編したということとそれ自体も、児童の村においてはじめて生じた出来事であった。それがどのような歴史的な出来事だったかということも、ここにある資料が示してくれるだろう。——浅井幸子

刊行に寄せて

『児童の村関係資料集成』全7巻・別冊1 幼児教育アーカイブ6

浅井幸子

児童の村小学校の創立

一九二三年一〇月、教育者・教育ジャーナリストの野口援太郎、下中弥三郎、為藤五郎、志垣寛によって『教育の世紀』と題された教育雑誌が発刊された。その創刊号に掲載された「宣言」は、雑誌を刊行する目的を以下のように伝えている。

世界の人々は今極度に疲弊している。永い永い間、愚かにも自ら作って来た殻の重みと他から強いられて来た圧力とに抑えられて、その生命の自由の発展伸張をなし得ずに。そしてまた、その重みと力とから脱れようとしてもがく努力の反復累積とのために。……疲労の極は麻痺であり、麻痺の極は死である。われ等は、それを怖れる。われ等同人は、自らはからずも、ここに「教育の世紀社」を創設し、学校「児童の村」によって新教育運動を起そうとし、その使命を果たすために、ここに「教育の世紀」を発刊する。それは、この世界的悩み、現代人共通の悩みを自らの悩みとするが故である。

（教育の世紀社「宣言」『教育の世紀』一九二三年十月号）

四人の同人たちは、「学校 児童の村」を「新教育運動」のための学校として計画した。その特徴は、既存の学校制度を子どもへの「圧力」としてすべて否定する急進性にあった。「児童の村」の「プラン」には、「極度の超形式主義をとり、学校、学級、教室、教科目、学年、時間割等すべての既成概念に超越してやる事

芦屋児童の村小学校では桜井祐男が、雲雀ヶ岡学園では上田庄三郎がその教育を主導した。

三つの「児童の村」が存続していた期間は短く、その規模も大きくない。しかしながらその教育は、確かに第二次世界大戦後の日本の学校教育を規定する経緯になっていると述べていい。児童の村の教育は、『教育の世紀』（一九二三年一〇月）、「綴方生活」（一九二九年一〇月）、「生活学校」（一九三五年一月）、「教育文芸」（一九二四年一月）といった教育雑誌を通して、同時代の教師たちに影響を与えていた。さらにその存在を大きなものにしたのは、同校の教育に対する戦後教育学の評価である。「大正期の自由主義教育運動の、最後の、そして頂点的な存在」（梅根恒）、「戦前におけるカリキュラム研究と実践の成果の到達点」（海老原治善）、「真の児童中心主義」（堀尾輝久）、「日本の自由教育運動を、さらに、天皇制ファシズム教育への抵抗運動へと発展させていた拠点」（川合章）といったように、児童の村の教育はさまざまな側面から非常に高い評価を受けてきた。戦後教育学は児童の村に魅了されてきたと述べていい。そして実際に、児童の村の教育実践の軌跡は、挑戦も達成も挫折も含めて、それほどの注目を集めるにふさわしい豊かさを備えている。

本集成には、三つの児童の村小学校とそこに集った教師たちに関わる資料のほかでも、学校通信、学級通信、学校文集、学級文集などの、ガリ版で作成され一般には流通していないものを中心に収録している。児童の村小学校以外の資料としては、上田庄三郎や小砂丘忠義が高知で教師をしていた時につくった同人誌や学校・学級文集、平田のぶが池袋児童の村小学校を退職した後に開設した「子供の村保育園」関連資料を収めた。



児童の村校内にたたずむ児童。



池袋児童の村小学校正門前の教員たち。

にしている」と記され、徹底した「自由」と「個性」の尊重が掲げられた。

この「プラン」に従って創設された学校が三つある。池袋児童の村小学校（一九二四年四月・三六年七月）、芦屋（御影）児童の村小学校（一九二五年四月・三八年七月）、雲雀ヶ岡学園（茅ヶ崎児童の村小学校）（一九二五年九月・二七年一月）である。池袋児童の村小学校には野村芳兵衛、平田のぶ、峰地光重、小林かねよ、戸塚哲郎、戸塚廉らが教師として集ったほか、同校を中心に刊行されていた雑誌『鑑賞文選』『綴方生活』の編集者を小砂丘忠義がつとめている。

新教育生成のプロセス

従来の研究において、公刊された雑誌や書籍に比べて、これらの資料は十分に参照されてきていない。しかしながらそれは、児童の村の教育がどのようにかたちづけられたかというプロセスを、内側から具体的に示してくれる貴重な資料である。こうした校内の「メディア」を通して、子どもたちや教師たちの声がとり交わされ、子どもたちと教師たちの学びが立ちあらわれる様相を具体的にみることができる。それは新教育、生活綴方教育、生活教育などが生成するプロセスそのものでもある。同時に学校内のメディアが多く用いられ、それが教育空間を再編したということそれ自体も、児童の村においてはじめて生じた出来事であった。それがどのような歴史的な出来事だったかということも、ここにある資料が示してくれるだろう。

本集成の出版は、資料の継承という点でも大きな意義がある。三つの児童の村小学校はいずれも現存していないため、その資料が散逸しやすい状況にある。一九一〇年代から二〇年代にかけて開設された多くの私立学校は、一〇〇周年を迎えるにあたって関連資料の収集と整理を行ってきたが、児童の村小学校の資料はそのようなたちで資料を引き継いでいくことができない。不二出版の尽力でこうして出版され、貴重な資料を後世に渡していけることを、とても嬉しく思っている。

（あさいさちこ・東京大学大学院教授）

本集成の特色

①これまで公刊されていない、一九二四年に創立した池袋児童の村小学校の文集、作文、教員記録を中心に、芦屋／雲雀ヶ丘の児童の村、小砂丘忠義、上田庄三郎ら若き教育者らが作成した同人誌、子供の村と平田のぶの関連資料などを可能な限り蒐集のうえ、はじめて集成、公刊する。

②池袋児童の村小学校の卒業生である今井紅子氏所蔵の写真、絵画などの貴重資料も収録。

③編者・浅井幸子はじめ、福元真由美、川地垂弥子らによる解説を別冊に附す。

④教育史をはじめとする教育思想、カリキュラム、教育方法、教育実践、教育社会学などの教育学研究者や教育現場の関係者、さらにメディア論、児童文化史、社会思想などの研究者などの基礎資料として。

徹底的な個性尊重の教育を解き明かす

門脇 厚司

このたび刊行される『児童の村関係資料集成』を強く推薦します。

関東大震災の翌年（一九二四年）開校され、閉校（一九三六年）までのほぼ二年間、子どもの個性を徹底的に大事にしそれを伸ばす教育をおこなった、大正新教育のシンボルともいわれたい池袋児童の村小学校。私が本格的にその研究をはじめたのは、筑波大学への移転が決まった母校、東京教育大学教育学部の講師に採用された一九七五年はじめのころだった。

それまでは、「池袋児童の村小学校」というユニークな名前の学校があったことは知っていても、どのような学校でどのような教育をしたか、さらに肝心なめその軌跡についても、ほとんどわかっていなかった。そこで私は東京都公文書館に一年ほど通い、一冊が一〇センチもある分厚い学事文書を調べあげて学校の変転を明らかにし、その記録を中心に『日本教員社会史研究』（石戸谷哲夫共編、亜紀書房、一九八一年）にまとめた。

それに続き私は、児童の村小学校で学んだ子どもたちが実際にどのような大人になったのかを明らかにしたいと考え、当時六〇代後半から七〇代前半だった卒業生へのアンケートとインタビューをおこなった。そして徹底的な個性尊重の教育を受けた子どもたちがどのような人間になったかを検証して、『大正自由教育が育てた力』（岩波書店、二〇二二年）として出版する幸運に恵まれた。教育学を生業とする国内外の研究者のほとんどが、「どんな教育が望ましいか」という問いに、「子ども一人ひとりの個性を大切に、それを徹底して伸ばす教育をすべきだ」と答えるのがつねであった。だが教育学者の誰一人として、これまでそうした個性教育の検証はしてこなかった。話は逸れてしまつたが、この本をその欠陥を埋める貴重な記録として読んでほしいと思つている。

この資料集成は池袋児童の村小学校やそれにつながる学校の貴重な記録を数多く収録している。保護者への学校だより、教師たちが書き留めた日録や報告——そこには、これから何を大事にし、何を教育するつもりかが示されている——、そしてとりわけ貴重な、子ども自身による文集や学校新聞なども含まれている。そこにはふだんの活動内容、どこに行き、何をみて、どんな体験をしたか、何を考え、学んだのかを豊富に記される。この得難い資料をていねいに読み込むことで、子ども一人ひとりの経験が人間形成にどう結びつたのか、徹底的に個性を伸ばす教育が子どもの何を育てたのかを、解き明かすことができるだろう。私は本集成がそのために活用されることを、強く願っている。（かどわきあつし・筑波大学名誉教授）

アヴァンギャルドの教育革新、その内側の声を開示する

佐藤 学

教育の世紀社（野口援太郎、為藤五郎、志垣寛、下中弥三郎）の実験学校として一九二四年に創設された池袋児童の村小学校は、わずか一二年で幕を閉じるが、「自由」（野口）と「協働体」（志垣）を追求したアヴァンギャルド（前衛）の教育として異彩を放っている。類似した試みは、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、ロシア（ソ連）、アメリカなどにもみられるが、池袋児童の村小学校の革新性と実践レベルの高さは国際的にみてもトップ水準であった。本集成はそこに通う子ども、教師、保護者の生身の声と活動とをつぶさに記録した、当事者による内側からの記録である。

池袋児童の村には、野村芳兵衛、小砂丘忠義、峰地光重、小林かねよ、戸塚簾、その周辺には上田庄三郎、平田のぶなど、日本の教育実践の歴史を彩る煌めくような教師群像が集つていた。だが私のこの認識は、本集成を読むことで変換を迫られた。これらの教師たちは「集つていた」のではなく、この学校で「学び育てられた」のである。そのエネルギーとコミュニケーション、その装置（場）の所在を本集成は、教育革新の放射線の光源として記録している（そして、この光源は乱反射している）。

児童の村は、子どもが個人として学び合い、教師も個人として学び合い、保護者も個人として学び合う共同体として成立していた。「子どもから学ぶ」ことを徹底して追求した教師たちの実践は素晴らしい。彼らは子どもから学び、同僚から学び、保護者から学ぶことよって成長し交響しあつて、「教育のユートピア」を共有したのである。個性と共同性を共に開花させた「教育コミュニティ」を現出させた、この実験の意義は大きい。日本の教師たちの教育学は、この短命の学校で誕生したのだ。その歴史から学ぶものは無尽蔵である。（さとう まなぶ・東京大学名誉教授）

未発未見の新天地

——「理想の学校」をめざした大正新教育の果実

田嶋 一

大正デモクラシー期にはすでに翻訳されていたエレン・ケイ『児童の世紀』やルソー『エミール』を愛読する人たちが増え、欧米ではじまつた新教育運動も次々に紹介され、日本の社会に児童中心主義の新しい教育を求める声が高まつていた。そのような時代に「児童の村」は、教育の改革を目指して一九二三年に結成された教育の世紀社（同人は野口援太郎、下中弥三郎、志垣寛、為藤五郎）を母体として誕生している。

同社は機関誌『教育の世紀』誌上に「教育の世紀社の教育精神」と「児童の村のプラン」を公表し、「理想の学校」たるべき「児童の村」は「四角四面の兵舎のような、もっと酷いになると獄舎のような感じのする従来の学校から超越」し、「吾等の共同生活の場」「児童らしき生活を生活せしむる場所」「真個の自由教育を行う場所」となる。「児童の村」の教育は「児童の自治」「職員の自治」「父兄の自治」に基づき、なによりも児童の主体性、興味関心から出発する。われわれは「未発未見の新天地」の開拓をめざす」と高らかに宣言した。その呼びかけに応じて、各地から野村芳兵衛、峰地光重、上田庄三郎、平田のぶ、小林かねよといった訓導らが集まり、最初の「児童の村」である池袋児童の村小学校が開校したのは一九二四年四月のことである。初年度の入学人数は各学年を合わせて五八名であった。

本集成には、「児童の村」の子どもたちがつくつた文集や学級通信、図画や学習の記録などが、あつう限り収録されている。これらの作品は、自由と自治の旗を高く掲げて教師と児童が共に「未発未見」の教育に取り組んだ教育改革運動の、かけがえのない果実である。

「子どもの知力」になによりも信をおき、自治にもとづく共同生活そのものがもつ教育力を引き出そうとしていたこの「村」で、実際のところ、いかなる教育の「未発未見の新天地」が拓かれることになったのか……。今回の刊行によって、私たちは児童の作品を通して、その真相を直に知ることができるようになった。この集成の頁を繰るたびに、子どもたちの生き生きとした生活と学習の様相、潜んでいる可能性が開花していく有様が目の前に浮かんできて、誰しもがこの運動が切り開いた、「未発未見」の世界の広がりやに瞠目し、驚嘆するに違いない。

歴史の闇のなかに埋もれていたこれらの作品群を掘り起こし、編集した方々の尽力に心から敬意を表し、本集成の刊行をともに喜びたい。（たじまはじめ・國學院大学名誉教授）



■学校創立時の野口援太郎
(のぐち えんたろう・1868-1941)



■小砂丘忠義、上田庄三郎らが発行した同人誌も多数収録。





「児童の村 六年間の生活」表紙

児童の村 六年間の生活

生徒によって作成された「児童の村 六年間の生活」は巻物2巻からなる。

「入学式」から「修業式」「中学・女学に入学する」まで、表紙を含めて25の場面で構成されている。「勉強」「遊びをはじめ、さまざまな場所への「遠足」、校舎の「引越」「新学校」、それに「熊（犬）かう」「かんさつ」「野口先生の顔」「こつんこ」「せきたんがらをまく」「池のかいぼり」「展覧会のじゅんぴ」など、生き生きとした児童の村の学校生活を彷彿とさせる内容となっている。（今井紅子氏所蔵）〔本集成収録〕



【熊かう】

「熊」という犬を飼うことに。大きな犬だったのだろう。

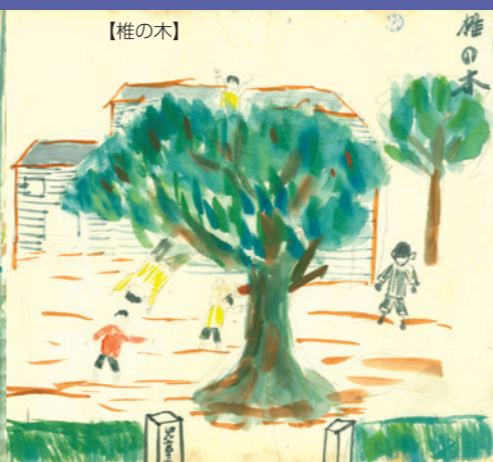


【相談会】



【遠足】

ほかに夏の学校の目的地である「保田」「長瀬」「園遊会荒川土堤」「あさか遠足」「日光旅行」「荒川」「奥多摩」なども描かれる。



【椎の木】

文集のなかでもしばしば言及される校庭の木。



【入学式】

この前には「そんちゃん入学」として、級友の面談の様子も描かれている。



【運動会】



【保田】



【新学校】



【長瀬】



【引越】

池袋児童の村では、毎年、自然に親しむことを目的に、避暑のため「夏の学校」を開催した。

移転先のあたらしい学校。

武甲山と思われるはげ山が描かれる。

「池袋児童の村長崎にこしてくる所」と記されている。



【中学に入学する／女学に入学する】



【修業式】



【展覧会】



【展覧会のじゅんぴ】



【試験勉強】



【太陽の子供新聞発行】

■本集成に「村の新聞」「村だより」とともに、現存する44号を収録した「太陽の子供」の印刷風景。ほかの文集も同じように子どもたちが印刷したのだろう。



野口先生の顔

第1巻 ● 新聞 (村だより・太陽の子供 ほか)

Table listing contents for Volume 1, including newspaper articles like '村だより' and '太陽の子供' with page numbers.

第3巻 ● 文集2 (川組/海組文集 ほか)

Table listing contents for Volume 3, including '文集2' and '川組/海組文集' with page numbers.

Table listing contents for Volume 1, including '村だより' and '夏休通信号' with page numbers.

Table listing contents for Volume 1, including '太陽の子供' and '児童劇脚本集' with page numbers.

第4巻 ● 小砂丘忠義

Table listing contents for Volume 4, including '小砂丘忠義' and '山の唄' with page numbers.

第2巻 ● 文集1 (めばえ・朝日 ほか)

Table listing contents for Volume 2, including '文集1' and 'めばえ' with page numbers.

第5巻 ● 上田庄三郎

Table listing contents for Volume 5, including '上田庄三郎' and '地軸' with page numbers.

第6巻 ● 児童の村資料

Table listing contents for Volume 6, including '児童の村資料' and '私立池袋児童の村小学校要覧' with page numbers.

第7巻 ● 子供の村資料

Table listing contents for Volume 7, including '子供の村資料' and '子供の村' with page numbers.

*は原本表記に従った。 ※巻構成、収録内容は変更となる場合がございます。